

【論 説】

看護技術における身体性

川 西 美 佐*

【要 旨】

機械化が進展している看護技術に対して、人間の身体独自の存在様態である「身体性」の観点から問い直す必要性が指摘されている。

本稿の目的は、わが国における文献の中で、看護技術の概念が示されている著作と基礎看護技術に関する教科書をもとに、看護技術における身体性についてどのように論じられてきたかを明らかにし、この観点についての考察を述べることである。

結果として、看護技術における身体性には、①看護観の表現、②看護者と受け手両者の身体の全体性、③両者の相互身体性、④両者の相互身体的な了解の4点が内包されていると論じられていた。しかし、基礎看護技術に関する教科書におけるこの観点からの記述は僅かであり、各技術項目における記述はみあたらなかった。よって、看護技術の概念を身体性の観点から探究し、各技術項目において展開し教授してゆくことが、今後の課題である。以上をもとに、看護実践と看護教育における考察を述べた。

【キーワード】看護技術、身体性¹⁾、相互身体性

はじめに

看護の起源は、本能的な母性愛の現れとして行われていた、母親のわが子に対する世話にあり、人類が始まったときからすでに行われていた（吉田、1954；永井、1964）。ここでの看護行為は、授乳中のわが子の頭が非常に熱いことに気づいた母親が、小川の水でその額を冷やしたというように、人間の身体と身体の直接的な触れ合いによって成り立つ行為であった。

しかし、21世紀を迎えた現在、われわれの日常世界では機械化が加速度的に進み、様々な分野で機械が人間に取って替わるようになってきている。その象徴がヒューマノイド、ロボットの開発であり、既に複雑な機能や知能の獲得が実現しており、ここ数年では、人間の身体独自の存在様態である身体性の獲得にも迫ってきている（國吉、佐々木、2001）¹⁾。このような機械化の進展の中で、人間同士については、手をつなぐとか親子が抱き合うという触れ合いの減少などから、身体性が疎外され、欠如してきていると指摘されている（市川、1992；梅原他、1998）。

当然、このような機械化の進展は看護の分野にも及んでおり、看護技術においても、既に看護者が患者に直接触れなくても脈拍や血圧は電子血圧計で測

定でき、かつその値が瞬時に電子カルテに転送されるようになってきている。看護者のマンパワー不足の際に擲擧されたロボットナースの出現も、あなたがち空想の世界だけの話ではないようで、現実味を帯びて我々に迫ってきているといえよう。しかし、看護が、その担い手である人間から受け手である人間への働きかけであるという本質を有する以上、全ての看護技術が機械化されるとは誰しも考えないであろう。

それでは、看護技術の中で機械に代替できないものとは何だろうか。筆者はその一つに、看護者が自らの身体を介して受け手の身体に働きかけるときの身体の在り方があると考ええる。具体的にいうと、患者が、看護行為を受けたある特定の看護者について、その行為を「手がやさしい」「手厚い」「身体をあずけられる」「手当をして貰ったという感じがする」と表現することがある。筆者がこれらの言葉を聞いたときの患者の様子は、その看護者には安心して自分を任せられるという感じであった。そして、特に苦痛を伴うような看護行為を受ける場合には、「あの人にしたい」と指名することもあった。これらの表現は、機械に代替できない、人間独自の身体の在り方を示しているといえよう。

このような身体の在り方への問いは、看護者の手

* 日本赤十字広島看護大学 kawamishi@jrchen.ac.jp

を患者の身体のどの位置に当てて支えるというような手法や、Aを行った後にBを行うというような手順の問題ではないと思われる。それよりも、人間が人間へ働きかける行為であるという、看護技術の本質に関わる問いであろう。この点について池川（1991）は、現象学の分野から生まれた、前述の「身体性」という概念を用いて看護技術の概念に示唆を与えている。池川は、看護技術を追究するには、その行為を科学的に実証するだけでなく、看護の行為者と受け手の身体が存在様態を表す、身体性の観点から問い直す必要があると指摘している。

そこで本稿では、わが国における、看護技術の概念が示されている著作と、基礎看護技術に関する過去10年間の教科書をもとに、看護技術における身体性についてどのように論じられてきたかを明らかにし、看護技術における身体性についての考察を述べることを目的とする。

「身体性」とは

17世紀にデカルトにより提起された心身二元論の考え方においては、人間は精神と身体という2つの全く異なる実体が共存している存在であり、身体はその二分された一方としてみなされてきた。この考え方における身体は、肉体的な特性をもったものとしての物体の一つである。しかしながら、人間は哀しみにうちひしがれているときは眼から涙を流すというように、実際には精神と身体とは極めて緊密に結びついているように見える。そこで、精神と身体との間の相互関係の可能性や実態が、心身問題として現代まで哲学的に問われるようになった。

この心身問題に対して様々な解答が試みられてきたが、20世紀になって現象学的な見方とともに、心身二元論の考え方とは別の、「身体性」と呼ばれる観点が生まれてきた。この観点は、精神と身体、また精神と身体の違いだけでなく、主体と客体の区別においても、これらは常にそのどちらにも還元できないような両義的な存在であり、二分することはできないという考え方である。われわれは身体を知覚や経験の対象としてとらえるが、同時にこの知覚や経験は身体によってなされる。前者において身体は対象とされる客体であるが、後者においては知覚や経験する主体となる。このような両義的な身体の在り方を「身体性」という（廣松他、1998）。

以上より、本稿において「看護技術における身体性」とは、看護を実践する場合の行為である看護技術において、看護者が自らの身体を介して受け手の身体に働きかけるときの両義的な身体の在り方と定

義して用いる。

看護技術の概念が示されている 著作にみる看護技術における身体性

ここでは、看護技術の概念が示されている著作をもとに、看護技術における身体性がどのように論じられてきたかについて検討する。検討した著作は、表1に示す11編である^{※1)}。

この中で「身体性」という用語を用いていたのは、野島（1976）、池川（1991）、鈴木（1996）の3編であった。加えて、「身体性の両義性」など身体性について述べていると解されるものは薄井（1974）、高崎（1993）の2編であった。

わが国において看護技術の概念に関する見解がみられるようになったのは1950年代以降であり、その代表的な著作が吉田（1954）と永井（1957）によるもので、これらは看護技術の概念形成の先駆けとして重要視されている（太田、2001）。吉田（1954, p. 6-7）は、看護の三要素として精神（spirit）、知識（knowledge）、技術（technique）を挙げ、「看護の最も具体的な表現が技術である」と、看護技術の重要性を示している。永井（1964, p. 7）も、看護の三要素として精神（Spirit）、知識・学問（Knowledge, Science）、技術（Art）を挙げ、看護技術の価値は手先の巧拙により決定されるものではなく、「十分に考えつくされた心のこもった行動を伴わなければならない」と述べている。ここで、永井が技術についてArtを用いている点は

表1 看護技術に関する見解が示されている主な著作

初版年	著 者 名	書 名
1954	吉田 時子	『基礎看護 原理と方法』
1957	永井 敏枝	『看護原理』
1970	波多野 梗子	『看護理論と実践の接点』
1974	薄井 担子	『科学的看護論』
1976	野島 良子	『人間看護学序説』
1977		「看護における技術と身体」*
1977	川島みどり	「看護実践の技術化」*
1977	氏家 幸子	『看護技術の科学的実証』
1991	池川 清子	『看護 生きられる世界の実践知』
1993	高崎 絹子	『看護援助の現象学』
1996	鈴木 正子	『看護することの哲学 看護臨床の身体関係論』

*『看護技術論』所収

注目すべきであるが、看護技術における身体性については論じられていない。

波多野 (1970, p.6-7) は、看護技術について「理論に依存しながら対象に応じてこれを修正しつつ適用していく専門的 (柔軟な) 技術」と述べている。そして、「すぐれた看護婦の腕まえ」を、経験と情熱だけに依存して名人芸に留めるのではなく、看護理論の確立によって技術化することが必要であると述べている。この「すぐれた看護婦の腕まえ」の中に、看護技術における身体性が内包されていると思われるが、波多野自身は身体性について論じてはいない。

薄井 (1974, p.59) は、看護技術を「実体にはたらきかける技術」としてとらえている。看護者は自分の認識に支えられ、自らの身体を使って対象に直接的な接触をもちつつ看護を行い、同時に看護者自身もこの直接的な触れ合いを通して対象への思い方が深まる。このように一人ひとりの個別な認識との触れ合いの過程をもっている点に看護技術の特殊性があり、看護の心 (看護観) を自らの身体を用いて表現する、その表現技術が看護技術であると論じている。認識・心・看護観とその表現媒体である身体を一体としてとらえている点は、まさに精神と身体を切り離して二分することができないという身体性の両義性を示しており、身体性について論じていると解される。そして、看護技術が看護観の表現技術であるということは、看護観は看護技術において看護者の身体をとおして表現されるといえる。すなわち薄井は、看護技術における身体性には、看護観の表現が内包されていることを示しているといえよう。

野島 (1976, p.7) は、看護技術における「身体性」と「道具性」について論じており、看護者は「全体身体そのものとして道具になる」と述べている。この著作が、筆者が検討した著作の中で「身体性」という用語が用いられていた最初のものである。ここでいう「身体性」とは、働きかけの主体としての身体が同時に道具という客体でもあるという、身体性の両義性を指している。そして、「全体身体そのものとして」とは、手、耳、眼という一つひとつの部分としてではなく、「有機的に統合」された全体として看護者の身体をとらえているといえる。すなわち野島は、看護技術における身体性には、看護者の身体性の全体性が内包されていることを示しているといえよう。

続いて野島 (1977, p.323) は、身体性の道具性において、特に身体のもつ皮膚感覚、触覚について論

じている。患者の身体に触れている看護者の手は、患者の側からいえば触れられている手であり、このような看護者と患者の手の在り方を、触覚のもつ「相互確認的な働き」と表現している。看護者は、脈拍を測定するときに暖めた手で患者に触れ、あるいは患者の身体を腕の中にしっかりと抱き込んで支えようとするが、それは感覚をとおして確認されるものが患者に与える効果を計算に入れているためであると野島はいう。これは、看護者と患者、両者の身体性の相互性を指しているといえよう。なお、視覚や聴覚においても、見る／見られる、きく／きかれるという図式は成立するが、触覚ほど直接的でもなければ、相互確認的でもない」と述べている。すなわち野島は、看護技術における身体性には、看護者と受け手両者の身体性の相互性が内包されており、加えて、この相互性は「触れる」という行為において立ち現れやすいことを示しているといえよう。

なお、これら野島の著作に前後して、看護の雑誌において、看護における「手」や「身体」に関する特集が相次いで組まれている点は注目すべきである。まず、1976年に『看護』で「看護における“手”」が特集され、1977年に『看護技術』で「手」や「触れる」ことへの現象学的考察がなされ、1978年に『看護』で「看護するなかの“身体”」が特集され、そして1979年に『看護学雑誌』で「手で思索する看護」が特集されている。これらは論者により様々な表現がなされているが、全て看護技術における身体性について、身体性の両義性と相互性の2点から論じており、看護界における関心の高まりを示している。

同時期の1977年に川島と氏家の著作があるが、これらは看護技術における客観的・科学的法則性を実証することに焦点を当てたものであり、身体性について論じてはいない。これ以後、看護技術に関する研究は、この実証への取り組みが主流をなしており、現在ブームともいえるEvidence-Based Nursingの取り組みに受け継がれている。

この流れに相対して、客観的・科学的法則性の実証からだけでは看護技術の本質は説明できないとして、1980年代に池川、高崎、鈴木が身体性の観点からの論文を発表し、1990年代に入ってこれらが著作となって発表された。3作とも、身体性の両義性と相互性の2点から身体性について論じているとともに、看護者の「触れる」という行為において身体性を説明している。

中でも池川 (1991, p.101-102) は、技術概念をアリストテレスの技術 (テクネー) 概念に遡り、

看護技術における身体性について最も丹念に論じている。池川は、行為者も受け手も共に生きた人間であるということを看護技術の本質として位置づけ、そこから相互性が生まれるとし、この相互性を「相互身体性」という用語で表現している。そして、相互身体性の中で互いに相手をわかる（了解する）ことができる述べ、これを「相互身体的な了解」と表現している。さらに、看護の技術（テクネー）そのものが、相互身体的な了解をめぐっては成立しない構造を有していると、その重要性を述べている。ここでいう「了解」とは、解釈学の最も基本的な概念であり、「言葉や事柄の意味をとらえること。また、意味を明確にしていく統一的で全体的な過程」（廣松他，1998，p. 1667）を意味している。「わかる（了解する）」とは、相手のことを部分的にわかるということではなく、全体的にわかるということであり、さらに、そのわかる過程（プロセス）を含めたものである。すなわち池川は、看護技術における身体性には、行為者である看護者と受け手の身体的全体的性、加えて、両者が身体をとおして全体的にわかりあうという相互身体的な了解が内包されていることを示しているといえよう。

以上より、看護技術の概念が示されている著作においては、看護技術における身体性には、次の4点が内包されていることが論じられていた。

- ①看護観の表現
- ②看護者と受け手両者の身体的全体的性
- ③両者の相互身体性
- ④両者が身体をとおして全体的にわかりあうという相互身体的な了解

基礎看護技術に関する

教科書にみる看護技術における身体性

ここでは、基礎看護技術に関する過去10年間の文献において、看護技術における身体性がどのように論じられてきたかについて検討する。基礎看護技術に関する文献を選んだ理由は、看護技術に関する文献の中でも、その概念について述べてあるものが多いためである。検討した文献は7編である^(注4)。なお、これらの文献は、基礎看護教育において教科書として用いられている文献であった。

この中で「身体性」という用語を用いていたのは、池川（1996）と田畑（2002）の2編であった。池川（1996）は、前述の著作（1991）と同様に、看護技術の概念をアリストテレスの技術（テクネー）概念として位置づけたうえで、身体の両義性、相互身体性、相互身体的な了解について論じている。田

畑（2002）は、看護技術における人間の尊厳に対する尊重を強調しており、その尊重は人間の身体性への尊敬によって示されなければならないと述べている。しかし、これ以上身体性について述べていないため、看護技術における身体性をどのようにとらえているかは不明である。

検討した7編のうち、他4編（小玉，1995；杉野，1998；内藤，2000；薄井，2002）は、人間を全体的にとらえたうえで、看護技術を看護者の全体としての身体を介して行われる行為と位置づけており、身体性の観点につながると解せられたが、明確に論じてはいなかった。残る1編（岡崎，1998）にはこれらの記述はみられなかった。

以上より、基礎看護技術に関する過去10年間の教科書においては、看護技術における身体性について明確に論じてあるものは僅かであった。しかも、その文献においても、各技術項目に至ると著者が異なるせい、身体性について述べられてはいなかった。

基礎看護技術の教科書として用いられている文献に、看護技術における身体性についての記述が乏しいということは、看護技術の概念における身体性の観点の重要性が1970年代から指摘されているにもかかわらず、この観点からの探究が未だ不十分であるといえよう。よって、看護技術の概念を身体性の観点から探究すること、そして、この観点を各技術項目において展開してゆくことが、今後の課題であるといえよう。

医療の場における身体性の現れ

1. すぐれた看護者の技における身体性の現れ

これまでみてきた看護技術における身体性が、看護実践場面でどのように現れているのかを、『国分アイのナーシングアート』（阿保，千野，近藤，平，1997，p. 3-8）における国分の技にみえる。本書は、国分の実習指導を受けた看護学生が後に著したものであり、彼らはその看護技術を「豊かな人間のふくらみ」をもった技としてとらえている。その一例を抜粋して示す。

看護学生だった著者が術後の患者にバックケアをした際、患者はとにかく「身体がこわばって」おり、「ありがとう、もういいわ」を繰り返していた。そのとき国分が来て、著者のすぐるような視線を黙ってうなずきながら受け止め、すぐに背部から患者の背中を支え、「さあ、大丈夫ですよ。力を抜いてごらんさい」と話しかけながら、「流れるように」体位をぐっと深く安定した側臥位に直した。そして、

蒸しタオルを腰背部に当て、バスタオルで覆った上から、丁寧にマッサージをした。患者は目を閉じ、大きく息を吐いて「あー、いい気持ち。生き返るわー」と呟いた。著者からみると、患者の様子は「身体全体からすっかり力が抜けて」国分に「身を任せきっておられる」ようだった。そして、著者にとってこの鮮やかな場面転換は、強烈な印象としていまだに思い出されるという。

この場面において、国分はまず、著者の「すぎるような視線」から、自らの身体でもってその場の状況と助けの求めを受け止めたのだろう。そして、こわばった身体全体で苦しみを表していた患者の身体に触れ、ぐっと安定した体位に直してから、マッサージをとおして丁寧に身体に触れている。ここで国分が触れているのは、術後の痛みを除去する対象としての身体ではなく、今まさに身体全体で苦しみを表している患者そのものだったと思われる。そしてこのような身体全体に、国分自らの身体全体をもって働きかけ、双方の身体性が同調するところで相互身体性が現れている。

国分は常に「その都度、この患者さんの今のこの苦しみをなんとかしてあげたいという気持ちと、何か良い方法はないものか知恵を注ぐことが、看護の技術を創っていく」と述べていた。この看護観が、患者に触れている国分の身体をとおして表現され、患者に伝わっていると思われる。そして患者は、身体全体をもって苦しみが癒えていることを国分に伝えている。ここに、身体をとおして全体的に互いをわかりあう相互身体的な了解が現れている。

国分の技は、このように「自然に」「さりげなく」「流れるように」行われる。しかし、受け手である患者のこわばった身体全体からすっかり力が抜けて身を任せきっているその様子は、強烈な印象として他者を惹きつけてやまない。

2. 相互身体性への希求の現れ

次に、相互身体性への希求の現れを、ソーシャルワーカー（以下、SWと略す）の事例研究（米村、2001）にみている。

病棟看護師からこのSWに、悪性腫瘍・骨転移で告知を受けており終末期の状態にある女性患者が、希望することを聞いても何の希望もなく、患者のニーズがわからないから協力してほしいと依頼があった。SWが患者のもとを訪れると、家族の中での役割が果たせないことが一番辛い、また以前病院でボランティアをしていたが何の意味があったのだろうかと話した。2回目の面接において、患者が痛みを

訴えたため、SWが思わずその部位をさすると「気持ちがいい」と目を閉じて黙り、その後も同じようなことをポツリと話した。以後の面接においては話をすることも辛そうになり、SWはベッドサイドで身体をさすりマッサージを続けた。患者の役に立っていないと考えたSWは、その役割である社会的資源の活用に着目し、マッサージを上手くできるボランティアの導入を患者にすすめた。ボランティアが見つかったときに患者が言ったことは、「あなたにマッサージしてもらったことで生きている自分が確認できた気がする」「つらくて話のできない私のコミュニケーションは身体をさすってもらうことでした。そしてあなたが一緒にいてくれたことで私も今の自分が許せる気がしました」というものであった。この言葉によりSWは、身体性への関わりとしてマッサージの意味を見出すのであるが、ここで患者が示しているのは相互身体性への希求であったといえるだろう。苦痛や苦悩により話すこともできない中で、患者は身体全体をもってSWに語りかけていたと解される。

近年、様々な職種が患者に関わるようになっており、「社会的なことはソーシャルワーカーに任せよう」「メンタルケアは臨床心理士に任せよう」と看護者が言うのを聞くことがある。確かに、それぞれの職種が専門性をもって協働することは必要である。しかしそれ故に、看護の専門性・独自性とは何かを問い直すことが迫られているといえよう。

筆者が十年前にある看護師長に聞いた話だが、あるカウンセラーがその師長に言ったことには、「最近多くの看護婦が私のところに勉強に来られるのがとても不思議です。私からみれば、我々カウンセラーが何時間もかけて患者との間に培ったものを、看護婦はいとも簡単に飛び越えてしまうのに」ということであった。この「いとも簡単に飛び越えてしまう」理由の一つに、看護技術における身体性の力があると考えられる。この力を見過して「メンタルケアは臨床心理士に」などと言うことは、看護の専門性・独自性の放棄に他ならないだろう。

次では、これまで述べてきたことをもとに、看護技術における身体性に関する考察を、看護実践と看護教育について述べる。

看護技術における身体性に関する考察

1. 身体性の観点からの看護技術の反省

看護者は、看護技術をもって受け手に働きかける際には、その行為だけでなく看護観を含めた精神までも表現され、滲み出でることを認識すべきである。

そして、自らの看護技術を身体性の観点から問い直すべきであろう。

「触れる」ことの重要性について前述したが、筆者は、看護師の清拭を手伝った際に愕然とした体験がある。その看護師たちは、患者の寝衣を外す前から清拭が終了するまでディスプレイの手袋をはめていた。寝衣に血液や排泄物が付着していた訳でも、そのような皮膚を観た訳でも無いのに、当然のように行われた行為に、愕然としたことを鮮明に思い出す。

感染予防のために使用しているということだったが、筆者にはこの必要性がどうしても腑に落ちない。ここでの患者の身体は清潔にせねばならない「皮膚」という部分であり、看護師の手は清潔にするための「道具」という部分だったのではないだろうか。それ故、両者の身体からは全体性も身体性も抜け落ちている。晒した肌に無機質な手袋の触感を感じながらでは、また、無機質な手袋で防護した手を通してでは、相互性も成り立たないだろう。そこでの看護技術は、汚れを除去するという作業として存在するのではないだろうか。

我々は、今いちど、人間が人間に働きかける行為という看護技術の本質に立ち返り、手袋をはめることによって護られるものと、それによって失うものを較量する必要があるだろう。

2. すぐれた看護者の技の技術化

通常、我々は自己の身体を意識することは例外的であり、意識するのは病気やけがをした時など、身体がよく働かない時であるといわれる（三輪、1989, p.11）。そのため、前述した国分のように、「自然に」「さりげなく」「流れるように」行われる看護技術において、よく働いている場合の身体性は、行為者本人には意識化され難い。よって、そのすぐれた技における身体性を明らかにし、継承できるように技術化してゆくには、行為者以外からのアプローチが必要となるだろう。

そこで注目すべきは、我々がすぐれた看護者の技として認識する以前に、看護の受け手がその身体性をもってその技を受け取っているという点である。本稿の冒頭で述べたように、受け手は、すぐれた技を受け取ったときには、「手がやさしい」「手厚い」「身体をあずけられる」などと表現している。また、このように言葉で表現しないまでも、国分の例のように、こわばった身体からすっきり力が抜けるというように、身体全体で表現している。そのため、受け手のこのような表現を手がかりとして、すぐれた

看護者の看護技術を観察し記述することにより、看護技術における身体性を看護実践の中から明らかにし、技術化してゆくことができると考える。

3. 身体性の観点からの看護技術教育

最後に、看護基礎教育における看護技術教育について、身体性の観点からの教育の必要性について述べる。

第一に、看護技術の概念において、看護技術の基盤として身体性について教授する必要がある。そして、学生が、看護者としての身体の在り方を学習する初段階の技術項目である、移動・清潔・排泄に関する援助やバイタルサイン測定において、身体性の観点を含めて教授する必要がある。この際、「触れる」ことの意義を強調すべきである。

なお、前述したとおり、現在、基礎看護技術の教科書として用いられている文献において、身体性の観点から記述してあるものは僅かである。そのため、教員自らが看護技術の概念を身体性の観点から探究し、この観点を各技術項目において展開し教授してゆく必要があるだろう。

第二に、臨地実習において、学生の看護技術を身体性の観点から指導する必要がある。生活体験の低下、身体機能の技巧性の低下、知識偏重の教育により、「今時の学生は、見学といったら本当に見るだけで、手が出ない」などと、学生の技術力の低下は、はるか1970年代から指摘され続けている（小松、2002, p.41）。そして、学内での技術教育の徹底が課題とされている。しかし、「手が出ない」原因はこれらだけではないと考える。重症患者の血圧を測定する際に、「自分が触れることで何か起きるんじゃないかと、怖くて触ることすらできなかった」と言った学生がいたが、見知らぬ他人の、それも時には容態が急激に変化するような身体に向かって、即座に「手が出る」ような身体性を、学生を含めて一般の人びとは持ち合わせていないのではないだろうか。

以前の教育では、臨地実習の場で、身をもって学ぶ、体験から身に付けるということがされていたのだろう。しかし、実習時間の短縮や前述したような学生の特性の変化によって、看護者としての身体性が身に付け難くなっていると思われる。手が出せず突っ立っている学生は、動こうとしても身体が動かない、動けないのかもしれないため、その行動を身体性の観点からみて指導してゆく必要がある。池川（1991, p.165）は、このような場合「学生の閉ざされた意識が相手に開かれていくためには、今まで

手を出すことができなかった患者の身体的なケアを体験させる」ことが必要であると述べている。看護者が手を添えて学生の身体が患者に向かえるよう導くという指導により、閉ざされた意識の開け、相互身体性への開けに至ることができると考える。

おわりに

本稿では、わが国における文献をもとに、看護技術における身体性についてこれまでどのように論じられてきたかを明らかにし、看護実践と看護教育における考察を述べた。

看護技術の本質を探究するうえで、この「身体性」の観点は古くて新しい観点であるといえよう。今後、看護技術における身体性についての探究がなされることは、看護技術の行為者である看護者も受け手も、共に一人ひとり個別の生きている人間であるという観点に立ち返り、看護技術の本質や看護の専門性・独自性を問い直すことにつながると考える。そしてこのことは、日増しに機械化や非人間化が進展してゆく、科学技術・高度技術偏重の現代医療の在り方に対して、一石を投じることになるであろう。

本研究は、平成13年度日本赤十字広島看護大学共同研究費（奨励研究）の助成を受けて行ったものである。

注 釈

- 1) 「身体性」を表す英語としては、corporeality, the sense of body, bodiness, physicalityなど、論者によって様々な語が用いられているが、本稿では、身体の在り方（存在のしかた）を示すcorporealityを用いた。なお、独語ではLeiblichkeit、仏語ではcorporéitéが用いられている（廣松他、1998）。
- 2) 国立国会図書館雑誌記事索引（MAGAZINEPLUS）で、「身体性」をキーワードとして検索すると、1945～2002.11の間に257件あった。文献数の変遷をみると、1994年までは概ね年間1～6件であったが、1995年以降は11～36件と、年々件数が増加している。分野別にみると、芸術、言語、文学、情報、体育、心理学、教育など様々な分野に渡っているが、特に目を引くのは、2000年以降、人工知能・ロボット開発の分野で、身体性に関する文献が急増している点である。
- 3) 表1に示した11編は、氏家（1977, p.6）により「現時点における看護技術論の代表的なもの」として示されている4編（吉田、1954；永井、1957；波多野、1970；薄井、1974）と、看護における技術について文献検討を行った上村（2001）により、看護技術についての見解がみられる著作として示されている5編（野島、1976、1977；川島、1977；氏家、1977；池川、1991）に、看護技術における身体性について述べてい

ると筆者が解した2編（高崎、1993；鈴木、1996）を加えたものである。

- 4) 7編の文献は、国立国会図書館蔵書検索（Web-OPAC）で、「基礎看護」「看護技術」をキーワードとして検索した100編の中から、成人・老人・母性・小児・精神・地域看護に関する文献を除外して28編とし、その中から看護技術の概念について述べてあるものとして抽出した文献である。

文 献

- 阿保順子、千野良子、近藤佳苗、平典子（1997）. 国分アイのナーシングアート. 東京、医学書院.
- 波多野梗子（1970）. 看護理論と実践の接点（初版）. 東京、医学書院.
- 廣松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、野家啓一、末本文美士編（1998）. 岩波哲学・思想事典（初版）. 東京、岩波書店.
- 市川浩（1992）. 精神としての身体（初版）. 東京、講談社.
- 池川清子（1991）. 看護—生きられる世界の実践知—（初版）. 東京、ゆみる出版.
- 池川清子（1996）. 看護における哲学的課題—看護技術論への試み—. 山崎知子監、明解看護学双書1 基礎看護学I（初版）. (pp. 51-58). 東京、金芳堂.
- 川島みどり（1977）. 看護実践の技術化. メヂカルフレンド社編集部編、看護技術論（初版）. (pp. 327-337). 東京、メヂカルフレンド社.
- 小玉香津子（1995）. 看護技術の基本. 小玉香津子、坪井良子、中村ヒサ編、看護必携シリーズ第1巻 看護の基礎技術I（初版）. (pp. 2-53). 東京、学習研究社.
- 小松美穂子（2002）. 看護技術教育の課題—現代学生の特性を踏まえた教育—. インターナショナルナーシングレビュー, 25 (2), 41-44.
- 國吉康夫、佐々木正人（2001）. 特集ロボット—身体性の冒険 ヒューマノイドのコンセプトと実践—. 現代思想, 29 (5), 32-49.
- 三輪正（1989）. 身体の哲学（初版）. 東京、行路社.
- 永井敏枝（1964）. 高等看護学講座17 看護原理（第5版）. 東京、医学書院.
- 内藤寿喜子、江本愛子（2000）. 新版看護学全書第13巻 基礎看護学2（第2版）. 東京、メヂカルフレンド社.
- 野島良子（1976）. 人間看護学序説（初版）. 東京、医学書院.
- 野島良子（1977）. 看護における技術と身体. メヂカルフレンド社編集部編、看護技術論（初版）. (pp. 300-325). 東京、メヂカルフレンド社.
- 岡崎美智子（1998）. 看護技術の考え方. 岡崎美智子編、看護技術実習ガイド1 基礎看護学—その手順と根拠—（第2版）. (pp. 2-6). 東京、メヂカルフレンド社.
- 太田節子（2001）. 基礎看護技術の研究の動向と今後の課題. 看護研究, 34 (5), 11-20.
- 杉野佳江（1998）. 看護技術の概念. 吉田時子、前田マスヨ監、標準看護学講座13巻 基礎看護学2（第4版）.

- (pp. 1-17). 東京, 金原出版.
- 鈴木正子 (1996). 看護することの哲学—看護臨床の身体関係論— (初版). 東京, 医学書院.
- 田畑邦治 (2002). 人間の尊厳にもとづく看護技術. 坪井良子, 松田たみ子編. 基礎看護学—考える基礎看護技術 I — (第2版). (pp. 3-13). 東京, 廣川書店.
- 高崎絹子 (1993). 看護援助の現象学 (初版). 東京, 医学書院.
- 上村朋子 (2001). 看護における技術について—日米の文献検討を中心として—. 日本赤十字看護学会誌, 1 (1), 29-36.
- 氏家幸子 (1977). 看護技術の科学的実証 (初版). 東京, メヂカルフレンド社.
- 梅原賢一郎, 鎌田東二, 高谷好一, 鳥越けい子, 山折哲雄, 鷺田清一 (1998). 新たな身体論の胎動. 創造の世界, 111, 46-69.
- 薄井担子 (1974). 科学的看護論 (初版). 東京, 日本看護協会出版会.
- 薄井担子 (2002). 系統看護学講座専門2 基礎看護学2 (第13版). 東京, 医学書院.
- 鷺田清一 (1998). 悲鳴をあげる身体 (初版). 東京, PHP研究所.
- 鷺田清一 (1999). 「聴く」ことの力—臨床哲学試論— (初版). 東京, TBSブリタニカ.
- 米村美奈 (2001). 終末期の患者へのソーシャルワーク支援についての事例研究—身体性としての患者の理解とそこでの「応答的役割」を考える—. 医療と福祉, 35 (1), 66-70.
- 吉田時子 (1954). 基礎看護—原理と方法— (初版). 東京, メヂカルフレンド社.

Corporeality in nursing art

Misa KAWANISHI*

Abstract:

About nursing art progressing mechanization, it is pointed out that it is necessary to reconsider from a viewpoint of "corporeality", it means original existence modality of a human being's body.

The purpose of this paper is to explain how corporeality in nursing art has previously been discussed by reviewing literature, and to offer my thoughts. My sources are books which express an opinion about concepts of nursing art, and textbooks about fundamental nursing art.

These books show that corporeality in nursing art involves the following four points : 1) a representation of nursing philosophy, 2) a wholeness of a nurse's body and care taker's body, 3) an intercorporeality of nurse and care taker, and 4) an intercorporealitcal understanding of nurse and care taker. However, there is little discussion about this viewpoint in these textbooks, and there isn't any discussion in each nursing art's item. Therefore, it is suggested for a future theme to reconsider concepts of nursing art from a viewpoint of corporeality, and to develop and teach this viewpoint in each nursing art's item. Based on these reviews, I offer my thoughts about this viewpoint in nursing practice and nursing education.

Keywords:

nursing art, corporeality^{it 1)}, intercorporeality

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing